若手研究者育成セミナー参加レポート

同志を作り、神経化学研究の発展を担う

廣川　智子
（横浜市立大学大学院　生命医科学研究科　生命医科学専攻
生体機能医科学研究室　竹居研究室　博士後期課程３年）

2017 年 9 月 7 日から 3 日間、仙台市で開催された「第 60 回日本神経化学会大会」に併せて行われる「第 10 回神経化学の若手研究者育成セミナー」に参加しました。この度、セミナーの受講生レポート作成の依頼を受けて、このセミナーとはどのようなものか、また、セミナーへの参加動機から、参加して学んだこと、そして、これからのセミナーに求めることについて、私の体験をもとに述べさせていただきます。

この「若手研究者育成セミナー」とは、これからの神経化学分野の研究を支える私たち学生・院生や若手研究者の育成を目的として開かれる若手のための勉強会です。学会参加後、セミナー参加者は５つのグループに分かれます。そして、学生の世話係であるチューターによる司会進行のもと、第一線で研究に携わっている講師２名から研究内容やキャリア形成などの講義を受け、グループディスカッションにより理解を深めます。その後、いろいろな分野の先生方が加わり、飲食を交えながらフリーディスカッション形式で討論を行い、交流を深めます。話題は現在取り組んでいる研究から、将来の夢、今後の進路からプライベートなことまで多岐に渡ります。

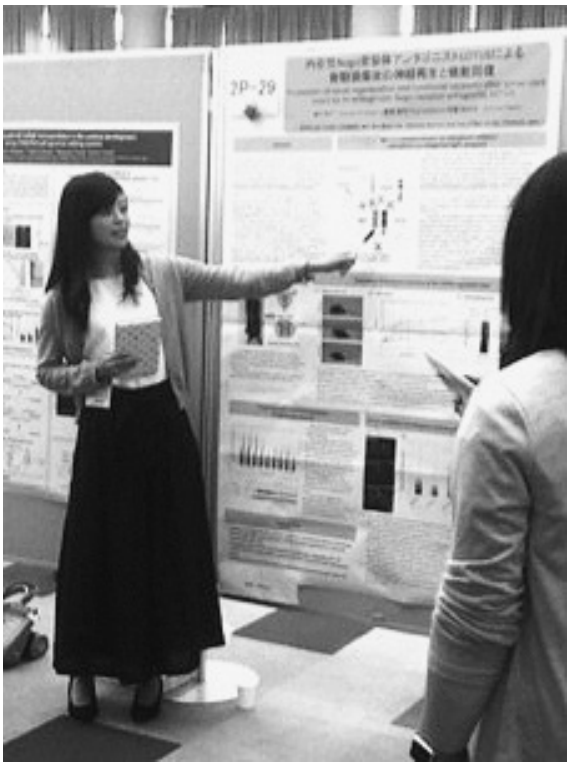
私のセミナー参加のきっかけは、昨年度、福岡市で開かれた日本神経化学会大会でした。大会自体に初めて参加するため、同時に催される「若手研究者育成セミナー」まで考えが及ばず、前回は参加申し込みをしませんでした。しかし、大会参加中に指導教授から「研究を進める上で、同志を作ることは大切である」というアドバイスを頂き、勇気を出してフリーディスカッションに参加してみました。その結果、そこで初めて出会った他大学の院生や研究者の方々と大変親しく交流することができ、学会終了後には、その仲間たちと一緒に学問の神様として知られる太宰府天満宮に出向き、研究がさらに進むように全員でお参りしてきました。このように、セミナーは研究についての理解を深めるのみならず、研究者の卵として同じ志を持つ仲間との交流という、学会に参加するだけでは得ることができない貴重な場であると実感するとともに、今後の研究生活においても非常に有益であると思い、今回、本セミナーに進んで参加しました。

今回私は、「脳を守る」というタイトルのグループディスカッションに参加しました。私自身、修士の頃から５年間に渡り「脊髄損傷後の神経再生」について研究を行ってきたので、このグループディスカッションに参加できることを非常に楽しみにしていました。当日は七田崇先生と山下俊英先生から、中枢神経系の再生と炎症についての講義があり、先生方が取り組まれている素晴らしい研究内容のみならず、なぜ研究者の道を歩み始めたのか、また、これまでの苦労や喜びについて、データだけでなく写真や可愛いイラストを交えて講演してくださいました。私にとって雲上人とも言える先生方にも、苦労や不安だった日々があったことを知りました。そして驚きとともに、どこか安心した気持ちになり、将来の姿

を考えながら、今は目の前にある課題や疑問を解決するために、必死に研究を行なっていこうと強く感じる有意義な時間となりました。

その後行われたフリーディスカッションでは、グループの垣根を越えて、講師以外の先生や学生とも討論を楽しみました。その中で、私たち学生と年齢が近いながらも、仕事として情熱と責任を持って研究を行っているチューターや若手研究者の方々との交流は、特に印象的でした。研究だけで無く、研究室や将来における悩みなどを（たまには愚痴も交えつつ）お話でき、得るものが多くありました。

また、「育成」という観点から今後さらにセミナーを盛り立てて行くために、口頭・ポスター発表に対して、先生方からフィードバックを頂いたり、学生が抱いている不安や今後の研究方針について、徹底的に議論したりできる場を、もう少し設けても良いでのはないかと感じました。自分の意見を発信し、相手の意見に耳を傾けて議論することにより、研究者として必須の能力育成に繋がり、新たな発想が生まれるきっかけが得られるのではないかと考えるからです。私自身、今回の日本神経化学会大会と若手研究者育成セミナーの参加を通して、講演では聴衆の多さに萎縮してしまい、「質疑を行えない」自分の弱点に気付き、まだまだ未熟な自身を見直す良い機会となりました。若手育成セミナーで発信や討論の能力を培い、大会で我々若手がその力を発揮していくことこそが、神経化学分野の発展に繋がっていくのではないかと考えます。

本セミナーに参加して知り合うことができた若手研究者、シニア研究者の方々、さらに切磋琢磨しあえる他大学の学生の皆さんとのネットワークは、これからの研究生活において私の原動力になると確信しています。そして、ひとりでも多くの若手の方に、セミナーへの参加をお勧めします。

末筆となりましたが、第10回神経化学の若手研究者育成セミナーの開催にあたり、お世話頂きました関係者の皆様に深く感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。